



赤坂宿（あかさかしゆく）は、東海道の江戸品川宿から数えて36番目の宿場。現在の愛知県豊川市赤坂町に当たる。御油宿や吉田宿とともに飯盛女を多く抱えていた同地は、「御油や赤坂、吉田がなけりゃ、なんのよしみで江戸通い」と言われた程、活気のある宿場町であったが、東海道本線の経路地から外れたために、御油宿同様、繁栄を鉄道通過地に奪われた。東海道筋で唯一営業を続けている旅籠として、「大橋屋」がある。赤坂宿と御油宿との間隔は、東海道の宿場の中で最も短く、2km 足らずである。関川神社（豊川市赤坂町字関川）には、「夏の月 御油より出でて 赤坂や」という松尾芭蕉の句碑があるが、この句は地理的に極めて近い両者の関係を詠んだものであるとされる。また、松並木が現存している（御油の松並木）。





藤川宿（ふじかわしゆく）は、東海道の江戸品川からかぞえて37番目の三河国の宿場。現在の愛知県岡崎市藤川町辺り。鎌倉街道時代からの古い宿場である。明治に入り、鉄道の発達とともに宿駅の機能は失われ、紡績工場が発展した。しかし旅人を日照りや寒風から守る松並木は、開発の波に押されながらも、大切に保存されている。藤川宿の名物は麦の穂が紫色の「むらさき麦」と「藤の花」で芭蕉の句にも「ここも三河むらさき麦のかきつばた」と詠まれている。





岡崎宿（おかざきしゆく）は、東海道の江戸品川宿から数えて38番目の三河国の宿場。現在の愛知県岡崎市中心部。岡崎宿は東海道でも府中宿・宮宿と並ぶ大きな宿場であった。また、岡崎は徳川家康の生誕の地であり。城下には敵の進入を防ぐため、道を複雑に巡らせ「岡崎27曲がり」と言われた特徴ある城下町でもある。名物の八丁味噌は有名。

